第３章　出土遺物

１　概　　要

伯耆国分寺古墳から出土した遺物の全体像を示すために（図版１・２）、現状で把握できる品目とそれらの員数を表にして掲げる（第１表）。あわせて、1924 年の梅原報告〔梅原 1924〕で示された名称・数量とも対照できるように努めた。ただし、鉄製品のなかには梅原報告以降の劣化により旧状をとど

第１表　伯耆国分寺古墳出土品一覧

	1924 年梅原報告			梅原考古資料	本　書			備　考
	名 称	員 数	番 号	番 号	名 称	員 数	番 号	
木棺	古　鏡	3	—	—	銅　鏡	3	第 16 図	八鳳鏡
			—	—			第 17 図	同向式二神二獣鏡
			—	—			第 18 図	三角縁神獣鏡
	剣身破片共	3 ～ 4	第 12 図 –3	第 14 図 –3	剣	1 以上	第 20 図 –1	同一個体？
			—	第 14 図 –4・5			第 20 図 –2	
			—	第 14 図 –6	ヤリ	2 以上	第 20 図 –3	同一個体？
			—	第 14 図 –7			第 20 図 –4	
			第 12・13 図 –6	第 14 図 –10			第 20 図 –5	
	刀子残欠	1	—	第 14 図 –14	短　刀	2	第 21 図 –1	同一個体？
			—	第 14 図 –15			第 21 図 –2	
			—	—			第 21 図 –3	
	鍬頭様利器	3	第 13 図 –14	—	方形鍬鋤先	2	第 22 図 –1	
			第 12・13 図 –8	第 15 図 –17			第 22 図 –2	
			第 12・13 図 –7	第 15 図 –16			—	現物なし
	鉄製鎌様品	3	—	第 15 図 –21	鉄　鎌	5	第 23 図 – 鎌 1	
			第 12 図 –9?	第 15 図 –18?			第 23 図 – 鎌 2	
			—	第 15 図 –19?			第 23 図 – 鎌 3	
			第 12 図 –10	第 15 図 –20			第 23 図 – 鎌 4	
			—	—			第 23 図 – 鎌 5	
	鉄製斧頭	3	—	第 14 図 –12	鉄　斧	4	第 24 図 –1	有袋鉄斧
			第 12・13 図 –11	第 14 図 –11			第 24 図 –2	
			第 12 図 –12	第 14 図 –13			第 24 図 –3	
	短冊形刃付鉄板	1	第 13 図 –13	第 15 図 –22			第 24 図 –4・5	短冊形鉄斧
	鉄製鉇	6 ～ 7	—	—	鉄　鉇	8 以上	第 25 図 – 鉇 1	米子市寄贈資料
			第 13 図 –15	第 15 図 –25			第 25 図 – 鉇 2	
			—	—			第 25 図 – 鉇 3	
			第 13 図 –16	—			第 25 図 – 鉇 4	
			—	—			第 25 図 – 鉇 5	
			—	—			第 25 図 – 鉇 6	
			—	第 15 図 –26			第 25 図 – 鉇 7	
			—	—			第 25 図 – 鉇 8	
			—	—			第 25 図 – 鉇 9	
			—	—			第 25 図 – 鉇 10	
			—	—			第 25 図 – 鉇 11	
			第 12・13 図 –4	第 15 図 –23			第 26 図 – 鉇 12	
			—	第 15 図 –24			第 26 図 – 鉇 13	
			—	—			第 26 図 – 鉇 14	
	鉄　鏃	2	—	—	鉄　鑿	3	第 26 図 – 鑿 1	
			第 12 図 –5	第 14 図 –9			第 26 図 – 鑿 2	
			—	第 14 図 –8			第 26 図 – 鑿 3	
	—	—	—	—	赤色顔料	190 g	第 28 図 –1	ほかに米子市寄贈資料あり
	—	—	—	—	棺　材	8 片	第 28 図 –2 ～ 9	
箱式棺	鉄　鏃	数個	—	—	鉄　鏃	5	第 19 図 –1	
			第 12 図 –2	第 14 図 –2			第 19 図 –2	
			第 12 図 –1	第 14 図 –1			第 19 図 –3	
			—	—			第 19 図 –4	
			—	—			第 19 図 –5	
	剣身片	1	第 12 図 –3?	第 14 図 –3?	鉄　剣	不明	不明	第 20 図 –1 と同一？

めない資料も存在する。そこで、梅原報告や梅原考古資料の実測図・写真にある個体については、法量や形態的特徴をもとに、本書で報告する資料と可能な限り対照させるようにした。また、対応関係が不明な資料の存在も明示するようにした。

なお、本研究の実施にあたっては、本来的に古墳に副葬された品目とその数を把握する必要があると考え、鉄製品の接合関係を確認する作業をおこなった。その過程において、複数の接合関係を確認するに至り、個体の全体像に迫るうえで重要な知見を得ることができた。ただし収蔵上の問題から、接合関係を確認した破片であってもその接着作業はおこなっておらず、現状はふたたび別々の破片の状態で保管するに至っている。したがって、本書において提示する実測図ならびに写真と、現状の資料状況とでは異なるところもあるので、その点には注意されたい。

2　銅　　鏡

銅鏡は３面が出土した。すべて舶載鏡であるが、漢鏡２面と三角縁神獣鏡１面と、製作時期の異なる鏡から副葬鏡群が構成される（第 16 ～ 18 図、図版３～５）。

（１）八 鳳 鏡（鏡１）

鈕座四葉文の長く伸びた先端によって鏡背を４区画し、各区画に対鳳を配する八鳳鏡である（第 16 図、図版３）。夔鳳鏡と呼びならわしてきた鏡式である〔樋口 1979〕。

遺存状態　部分的に欠損があり、現状はそこを補填している。また、細かな亀裂や内部に発生した錆によって表面が浮いた状態となっており、遺存状態はやや悪い。鏡背面の各所には鮮やかな色調の赤色顔料が付着する。鏡面の広範囲には、布の付着した痕跡と赤色顔料がみられる。

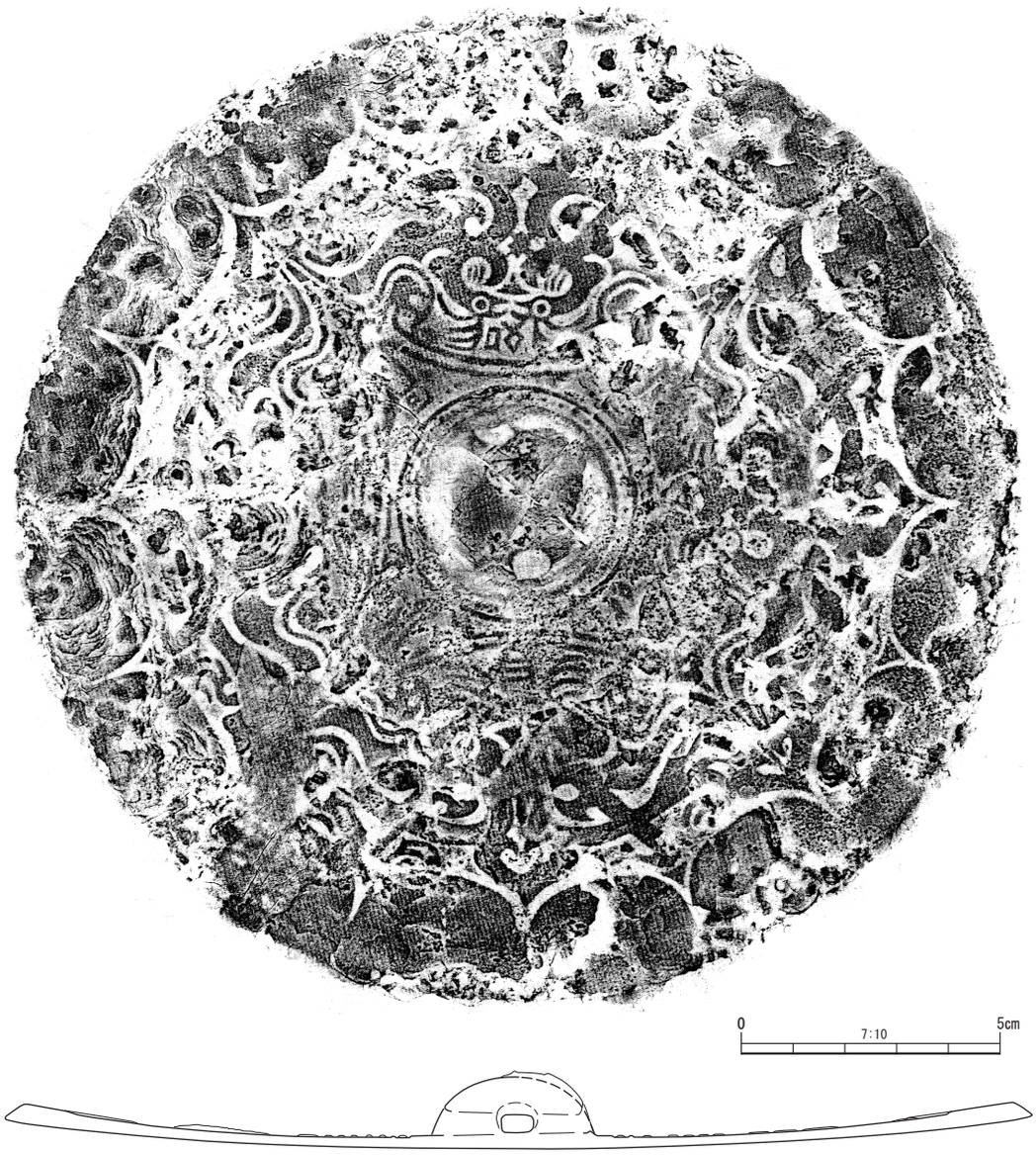
法　　量　直径 19.8㎝、厚さは内区が２～３㎜程度、外区が３～４㎜程度である。現状での鏡面の反りは６㎜程度とやや強い。重量は 560g。八鳳鏡のなかでは大型の事例である。

文様・形態　中心に鈕があり、直径約 2.9㎝、高さ約 1.2㎝の扁平な半球形を呈する。鈕孔は孔付近を面取りするように研磨するが、内部は長方形を呈する（図版６－１・２）。鈕孔下辺は鈕座面よりわずかに浮いた位置にある。鈕座は円座、珠文座とめぐり、１条の円圏を介して四葉座がある。四葉座は糸巻形を呈し、葉文部が長くのびた形態をもつ十字糸巻形鈕座である〔秋山 1998〕。

銘は四葉座の葉文部のなかと四葉座間にそれぞれ配する。四葉座葉文部内には、図で右上の区画から反時計回りに「□（長カ）」・「宜」・「子」・「孫」からなる四字の吉祥句を１文字ずつ入れる。四葉座間は鳥文の頭部上方にあたる４ヶ所に、図で右の区画から反時計回りに「□」・「如」・「日」・「月」からなる四字の吉祥句を１文字ずつ入れる。

内区の主文様は、相対する二羽の鳳文を１単位とし、これを内区に大きくのびた鈕座葉文部のあいだ４ヶ所に配する。鳥文は嘴をつきあわせるように向かいあった側面観を平彫りで表現する。内外区の境界には段差がなく、平板な鏡体である。外区には 16 個の半円を連ねた連弧文をめぐらす。縁部は平縁であり、外斜面の傾斜は緩やかな傾斜端面をもつ。

鋳造・研磨　鋳上がりはやや良好である。ただし、鈕のごく周囲は文様の彫りが浅く、やや不明瞭な状態を呈する。そのなかでも、「月」銘付近の一定範囲はとくに文様の表出があまく、鈕孔も上辺が丸みを帯びる。鋳引けと判断され、鈕孔と「月」銘を結ぶ延長線上の縁部に湯口がとりつけられていた可能性が高い。形状の丸みと表面の艶やかな状態から若干の摩滅が想定されるが、本来は鏡面、縁部、鏡背面ともに丁寧な研磨をほどこされていたと考えられる。研磨の単位などは確認できない。



第16図　八鳳鏡（鏡１）

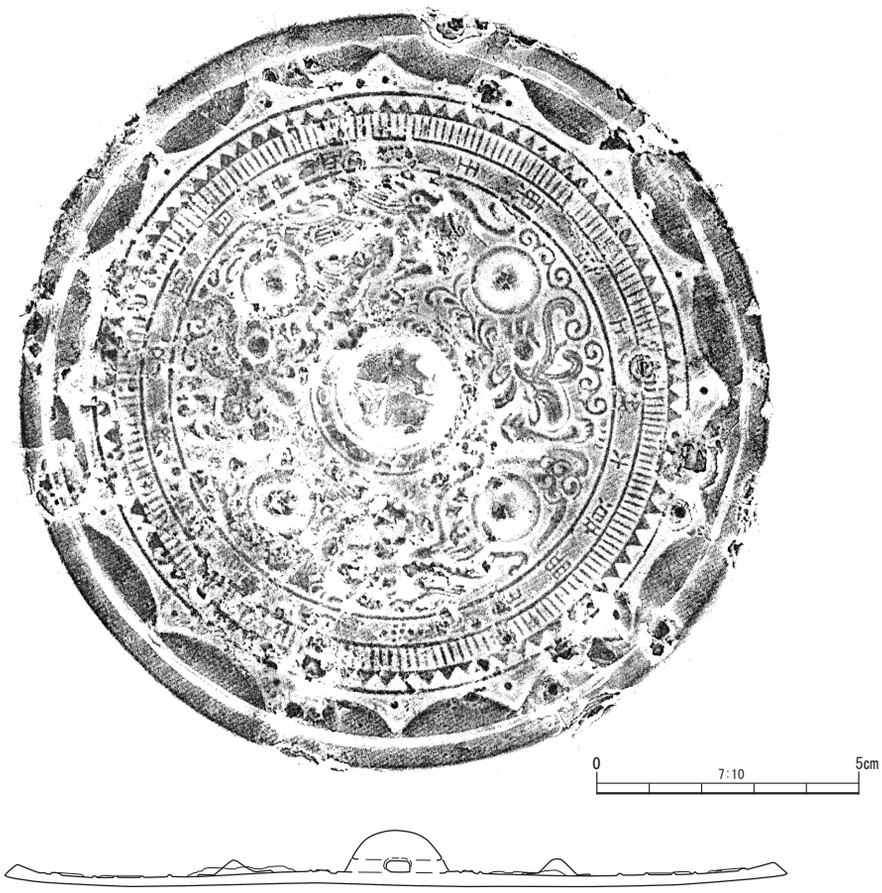
（２）同向式二神二獣鏡（鏡２）

内区主文様を構成する神獣像がすべて天地を同じくする配置をとる同向式神獣鏡である（第17図、図版４）。神像２体と獣像２体によって構成されることから、同向式二神二獣鏡となる。

遺存状態　表面を覆う錆は少ないものの、内部から破裂したような錆が発生している。また、全体に細かな亀裂がいくつも生じており、見た目以上に遺存状態は悪いと判断される。鏡背面の凹部にはわずかに赤色顔料がみとめられる。鏡面の広い範囲にところどころ目の細かな布があり、鏡面全体が布に接するような副葬状態であったことが想定される。

法　　量　直径14.9cm、厚さは内外区ともに２㎜程度と一定である。鏡面の反りは約２㎜とやや弱い。重量は249gである。

文様・形態　中心の鈕は、直径約2.0cm、高さ約８㎜の比較的整った半球形である。鈕孔は長方形に近いが、若干の丸みをもつ辺もある（図版６－３・４）。鈕孔下辺は鈕座面とほぼ等しい。鈕座は円座



第 17 図　同向式二神二獣鏡（鏡２）

と有節重弧文座の２帯からなる。

内区主文部は４つの乳によって区画し、４区画のそれぞれに１体ずつ神像と獣像を交互に配列する。大きな円座にのる乳は、径約７㎜、高さ約 3.5㎜の円錐形乳である。乳の先端はわずかに丸みを帯びる。主文様を構成する神獣像はすべて天地を同じくする同向式の配置をとる。上から時計回りに、青龍、東王父、白虎、西王母に対応する表現をとる。主像はやや高さの低い浮き彫りで文様を表現される。２本の角と翼の表現がみられる青龍は、大きく口を開けて前方を向き、時計回りに疾駆する姿勢をとる。これにたいし、四足表現と長い尾に獣毛を表現をもつのみの白虎は、時計回りに疾駆しつつも、大きく口を開けて後方を振り返るような姿勢である。東王父は三山冠を被る坐像であり、右手に植物らしきものをもつ。西王母は錆のため細部がわからないが、玉勝付冠や渦状冠ではなく、頭頂部を高くした山形の冠を被る坐像である。ともに体を鈕に向けるような姿勢をとり、肩から蕨手状に伸びる気がみえる。東王父と西王母の下方には複数の渦文からなる雲座状の表現がみとめられる。

圏線を隔てた内区外周部は、銘帯と櫛歯文帯からなる。銘帯には始点に複数の珠文を置いたのち、「吾作明竟（鏡）大好　上有東王父西王母　宜子孫□□（番カ昌カ）兮」という七言句を基本とする銘文を反時計まわりにめぐらす。銘帯の外周の櫛歯文帯はその間隔が粗い。

外区は斜面を介して内区より一段高くなる例が多いが、本例は内外区の高さに差がない。外区文様は内側から外向する鋸歯文帯、連弧文帯である。連弧文は 16 弧からなり、弧文間に珠文を一つ添える。外区と縁部は浅い凹線によって画し、緩やかな傾斜を呈する傾斜端面をもつ縁部へと至る。縁部形態はわずかに斜縁状であるが、平縁に近い形態である。

鋳造・研磨　文様の表出のあまい部分があるが、文様の上面に限られていることから、鋳造後の研磨もしくは摩滅によるものであろう。とくに神像の顔面表現は不明瞭となっているが、本来は比較的鋳上がりのよい製品であったと考える。湯口の位置ははっきりしない。銘文や文様など細線が近接した部分にいくつかの笵傷を確認できる。研磨は鏡面と縁端部、さらに鏡背面におよぶ。鈕と乳の頂部には光沢がみられるが、摩滅か研磨による加工であるかを判断できない。外区から縁部にかけては部分的に削り込むような研磨によって、連弧文帯と縁部との境界にある凹線を際立たせる。研磨は条痕を残す強いものである。全体に鏡背面の研磨は弱く、乳も先端部付近以外はそのほかの凹部と同様に鋳肌に近い表面状態をとどめる。

（３）三角縁・天・王・日・月・獣文帯三神四獣鏡（鏡３）

三角縁神獣鏡のなかでもいわゆる舶載鏡として分離できる一群に属し、目録番号 47〔京都大学考古学研究室 2000〕、同笵鏡番号 28〔小林 1971〕に該当する鏡である（第 18 図、図版５）。広島県潮崎山古墳〔脇坂 1979〕から出土した「同笵鏡」が１面存在する。

遺存状態　縁部から内区に達する大きな亀裂が１ヶ所あり、鏡体も歪みが発生している。全体に遺存状態はやや悪い。鏡背面の外区を中心に部分的ながら鮮やかな色調の赤色顔料が付着する。鏡面に布の付着がみとめられ、広範囲におよぶ。赤色顔料の付着も若干ながら観察できる。

法　　量　直径 22.4cm、厚さは内区で 1.5㎜程度、外区で４㎜程度である。鏡面の反りは鏡体の歪みが著しく不正確ではあるが、６㎜程度になるものと思われる。重量は 797g である。

文様・形態　中心の鈕は直径約 3.2cm、高さ約 1.5cmの比較的整った半球形を呈する。形態的特徴から、鈕ａ式となる〔岩本 2008〕。いわゆる長方形鈕孔であり〔福永 1991〕、鈕孔下辺は鏡背面より浮いた位置にある（図版６－５・６）。鈕座は断面蒲鉾形の圏帯をめぐらす。文様はない。

内区主文部には乳で４区画した、それぞれの区画に神像と獣像を交互に配する。乳は直径 0.9 ～ 1.0 cm、高さ７㎜程度の小ぶりの円錐形乳である。乳座はない。乳ｉ式〔岩本 2008〕。

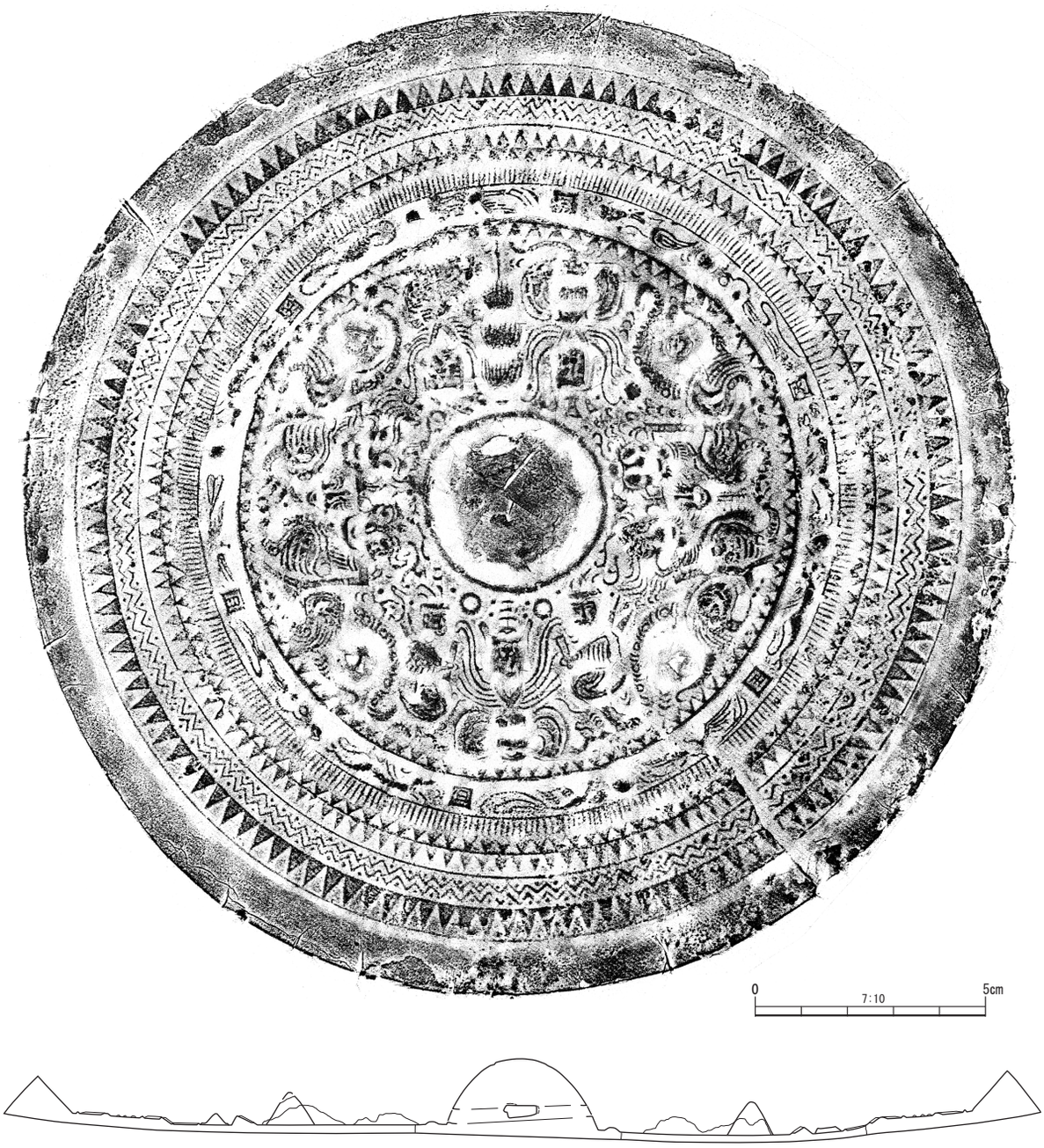
神獣像表現は岸本表現⑤〔岸本 1989〕、神獣像配置は小林配置Ａの変形形式〔小林 1971〕である。２区画の神像を配する区画のうちのひとつは、神像１体と脇侍２体からなる。神像は玉勝状の表現が冠の両脇に付属することから西王母と推測しうる。また、神像の頭部上方にはごく小さく傘松形文様をあらわし、その両脇に環状の文様を添える。これに相対するもうひとつの区画は、神像２体からなる。ただし、うち１体はやや姿勢を横にとる。正面を向く１体は三山冠をかぶることから、東王父をあらわしたものであろう。２体の神像のあいだには写実的な表現の傘松形文様を置く。傘松形文様は房状の表現を３段に重ねる。獣像を配する２区画は、おおむね同じ構図をとる。いずれも角の表現から龍を表現したものと想定でき、大きく開けた口には維綱を銜える。獣像は向かい合うように配置され、そのあいだにも頭部のみであるが、１体の獣像表現がみられる。

内区主文部とその外周は、断面三角形の界圏によって区画される。界圏の内斜面には外向する鋸歯文帯をめぐらす。内区外周文様帯は獣文帯と櫛歯文帯からなる。獣文帯は方格と乳を６個ずつ交互にもちいて全体を 12 区画する。各区画には異なるモチーフの文様を配する。玄武や朱雀といった獣像を中心に、側面観で表現した四足獣、円環をもつ侍仙などがあらわされる。獣文帯の向きは反時計回りを基調とする。方格には１文字ずつ銘を入れ、左上から時計回りに「天」・「王」・「天」・「王」・「日」・「月」とする。

外区は内区とは段差を介し、内外区を分ける斜面の上面には鋸歯文が配される。外区は鋸歯文帯、珠文を添えた複線波文帯、鋸歯文帯からなる。もっとも外周の鋸歯文帯には１条の外周突線がめぐり、

断面三角形の縁部へと至る。断面三角形の小さな縁部とやや薄いながらも一定の厚みを保つ外区から、外区４式と判断される〔岩本 2008〕。

鋳造・研磨　全体に文様の表出は比較的シャープであり、鋳上がりはよい。鏡背面のところどころに小さな笵傷を確認できるが、全体として傷は少ない。鏡面と縁部外斜面を研磨して仕上げる。鏡背面の研磨はほとんどなされず、本来の鋳肌と思われる粗い表面を残す。縁部内斜面には鋳型の成型痕とみられる条線が観察される。



第 18 図　三角縁・天・王・日・月・獣文帯三神四獣鏡（鏡３）

３　武　　器

武器には鉄鏃と刀剣類があり、すべて鉄製品である。前期古墳にしばしば副葬される銅鏃は、その存在が確認されていない。鉄鏃の盛矢具にかかわるような有機質などもみとめられない。

（１）鉄　　鏃（第19図、図版６）

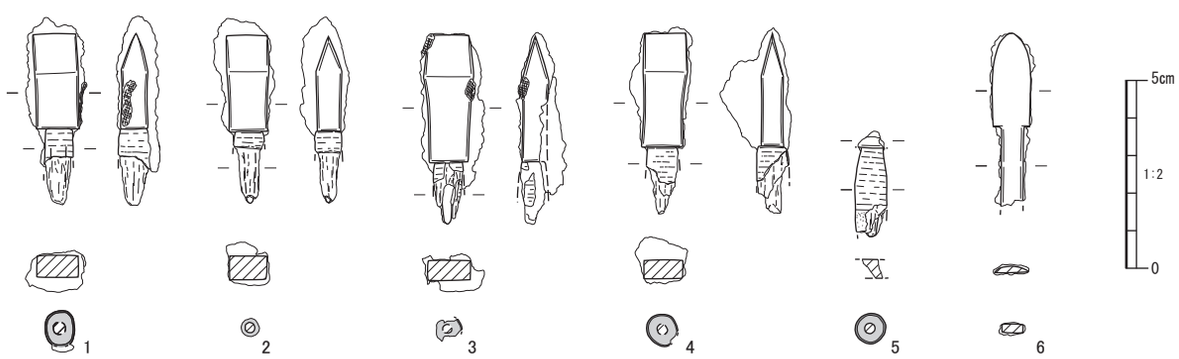
鉄鏃の総数は６点を数える。このうち５点が方柱状の鏃身部の先端に一文字の切先をもつ鑿頭式に属し、残る１点は細い頸部に扁平な柳葉形の鏃身部がとりつく有頸柳葉式である。鑿頭式鉄鏃は、梅原報告によれば大多数の副葬品が出土した木棺埋葬とは別の「箱式棺」にともなうとされる。有頸柳葉式の１点は、梅原報告ならびに梅原考古資料には記述のない資料であり、その取り扱いには注意を要する。伯耆国分寺古墳から出土した鉄鏃と確実視できるのは鑿頭式鉄鏃５点となる。

鑿頭式鉄鏃　鑿頭式の断面形態は鏃身部が方形、茎部がおおむね円形（多角形か）を呈する。確認できる資料はすべて鏃身部に稜をもつ両鎬であり、方鎬の例はみられない。茎を矢柄に挿し込む有茎鏃である。鑿頭式は鏃身長にたいする厚みの違いから大きく二分できる。鏃身が短く厚いものを１類（１・２）、鏃身が長く薄いものを２類（３～５）とする。１類と２類は法量だけでなく、形態にも違いがみられるが、いずれもいわゆる「有稜系」〔松木 1991〕に属する鉄鏃である。

鑿頭式１類は小型厚手である（１・２）。全長約 4.5cm、鏃身長 2.5cm程度、鏃身厚約６～７㎜、茎部長約２cmである。鏃身の最大幅が刃部の位置にあり、関部へと幅を減ずる形態を指向する。平面形において鎬から関にかけてゆるやかに内彎する点が特徴である。側面形にはそれほど顕著な彎曲がみられない。茎部の断面形態はおおむね円形（多角形か）を呈する。茎部には矢柄に由来する木質と、固定のための樹皮巻が口巻として残る。

鑿頭式２類は、やや大型でありながら薄手である（３～５）。全長約５cm、鏃身長３～ 3.5cm程度、鏃身厚約５㎜、茎部長約 1.5cm強である。鏃身の最大幅が鎬の位置にあり、とくに平面形において鎬から関にかけてゆるやかに内彎する点が特徴である。側面形にはそれほど顕著な彎曲がみられない。茎部の断面形態はおおむね円形（多角形か）を呈する。茎部には矢柄に由来する木質と、口巻の樹皮が残る。口巻が長さ 1.5cmほどみとめられ、それより矢羽側がつや消し部となるものもある（５）。

有頸柳葉式鉄鏃　頸部の途中で折損する。全長は 4.5cm以上、鏃身長約 2.5cm、頸部長２cm以上である。鏃身厚は２㎜ほどと薄く、片丸造の断面形態を呈する。頸部関は直角であり、深さ約１㎜と浅い。頸部の厚みも２㎜程度と薄い。いわゆる長頸鏃に属するものであり、上述の鑿頭式鉄鏃と同一の組成をなすとは考えにくい。梅原報告ならびに梅原考古資料では記述を確認できないことから、伯耆国分寺古墳とは異なる後期古墳出土の鉄鏃が保管の過程で混入した可能性を考えておきたい。



第19図　鉄　　鏃

（2）刀 剣 類（第20・21図、図版7）

刀剣類には、外装の特徴から剣と想定される破片が2点、ヤリと想定される個体が1点と破片2点、短刀の破片が3点ある。法量などから、個体数としては少なくとも剣が1点、ヤリが2点、短刀が2点副葬されていたと考えられる。

① 剣（第20図、図版7）

破片を2点確認できるが、有機質の付着状況や法量の共通性から同一個体である可能性が高い（1・2）。したがって、現状で確認できる剣の確実な個体数は1点となる。刃部が途中で折損した破片であり、茎部は存在しない。刃部の残存長が約19cm、幅約2.3cm、最大厚約5㎜である。フクラ切先であり、断面はレンズ形を呈する。刃部の表裏に縦方向に目の通る木質が付着する。表裏で部材をあわせた痕跡があり、いわゆる二枚合わせ式の鞘とみられる。布の付着は確認できない。同じ剣形武器でも木製鞘におさめられる点が、後述するヤリとの相違点である。

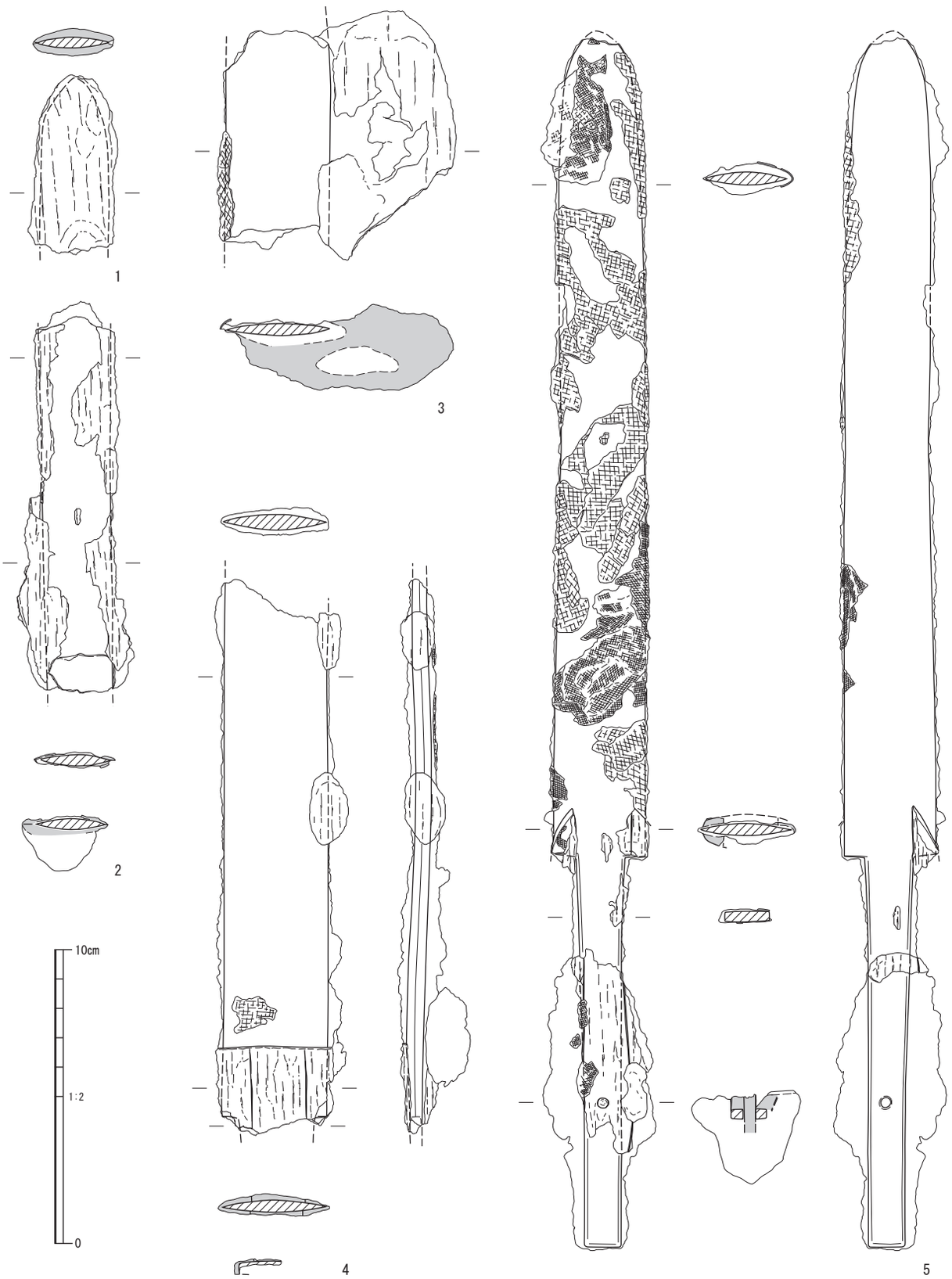
② ヤ　　リ（第20図、図版7）

ヤ リ 1　2点の破片を法量から同一個体と判断する（3・4）。　3は長さ約7.5cm、幅約3.5cmの切先に近い刃部の破片である。断面はレンズ形を呈し、厚さは4㎜である。切先は丸みを帯びた形状とみられる。目の粗い布が付着する。4は長さ幅約19.0cm、刃部幅約3.6cm、関部付近の茎部幅は2.6cmである。厚さ約4㎜の断面レンズ形の刃部であり、目の粗い布がところどころに付着し、この個体にともなわない木質が付着する。深さ6㎜ほどの大きく落ちる直角関であり、茎尻へと幅を狭めるようであるが、折損により明らかではない。

茎部には把装具に由来する有機質が残る。把装具は木製であり、把縁は刃部にまで達する呑口式となる。把縁の切先側は直線的な形態を呈し、複数の部材を組み合わせた痕跡がみられる。3つないしは4つの部材からなるいわゆる四枚合わせ式〔田中1991〕と判断できる。把構造から、剣ではなくヤリ先と考えられる。

ヤ リ 2　切先をわずかに欠損する（4）。現存長は約41.0cm、復元長は41.5cm程度となる。刃部はフクラ切先をなし、現存長が28.0cm、関部付近の幅が3.1cm、最大厚がおよそ5㎜となる。深さ7～8㎜ほどの明瞭な直角関をもつ。刃部の断面はレンズ形であり、明瞭な鎬は確認できない。刃部には木質がまったくみとめられず、布の付着が顕著である。布目には精粗の異なる2種があり、目の細かい布の上に粗い目の布を確認できる部分が多い。しかし、布目の方向は一定ではなく、製品そのものを巻いたものか、別の目的で使用された布が付着したものかは判断できない。茎部は長さ約13.2cm、関付近で幅1.7cm程度、最大厚4㎜ほどである。茎部断面は長方形である。茎幅が茎尻までほとんど狭まることのない、一定の幅を保つ細長い形態の茎部である。茎尻は幅約1.2cmであり、一文字尻となる。茎尻から約5cmの位置に、直径3㎜程度の目釘孔が1つ存在し、木製の目釘が残る。

茎部には把装具が比較的良好に遺存する。把装具は木製であり、把縁は刃部に達する呑口式となる。遺存状態が良好ではないが、把縁の切先側が山形に整形される。部分的にしか遺存しないが、把縁の表面には塗布された黒漆が残存しており、その上には刃部と同様の布が付着する。把縁付近に糸巻きを確認することはできない。黒漆がかけられた表面に布が付着しながらも、糸巻きが存在しないことから、把縁の山形突出部分に糸を巻く形式にならない可能性が高い（図版12－1）。把には複数の部材を組み合わせた痕跡を観察することが可能であり、3つないしは4つの部材からなるいわゆる四枚



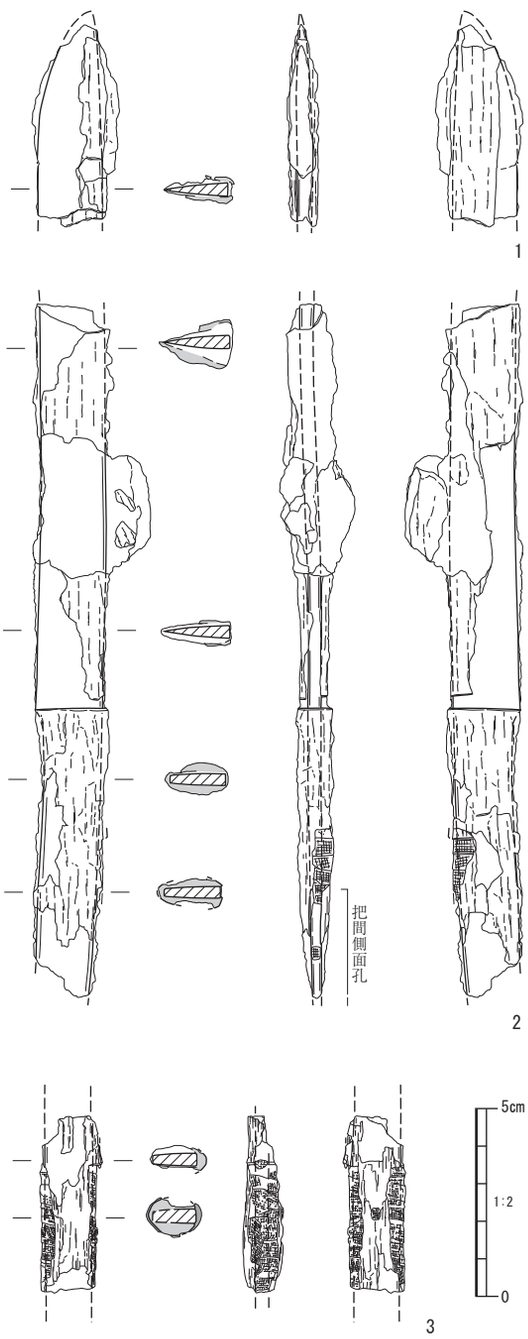
第 20 図　剣・ヤリ

合わせ式〔田中 1991〕と判断できる。糸巻きの有無を確認できるわけではないが、有機質の遺存状態からは糸巻底辺型〔豊島 2004〕とみられる。把の形態と構造から、剣ではなくヤリ先と考えられる。

③ 短　　刀（第 21 図、図版７）

身幅が約 1.8cmの鉄刀の破片が２点ある。身幅の細さから、短刀とみられる。このうち１点は切先の破片であり、もう１点は刃部から茎部にかけての破片である。さらに、もう１点茎部の破片があるため、短刀は２点以上存在したと考える。

短 刀 1　切先を含む破片（1）と刃部から茎部にかけての破片（2）を、法量や残存状況から同一個体の可能性が高いものと判断する。１は残存長 5.4cm、最大幅 1.7cmの切先を含む破片である。フクラ切先であり、刃部断面は楔形を呈する。鞘に由来する木質が表裏に付着する。２は残存長 18.4cm、そのうち刃部が 10.7cm、茎部が 7.7cmからなり、刃部の最大幅は 1.8cm、関部付近の茎部幅は 1.6cmである。刃部の断面形は楔形、茎部の断面形は腹側が薄い長方形である。法量から小さく落ちる関と想定されるが、木質が付着しているため細部の形状は不明である。残存する範囲では、茎部は茎尻へとわずかに幅を狭める。刃部と茎部に木質が付着する。刃部の木質は表裏に付着しており、鞘に由来するものと考えられる。茎部に付着する木質の端部は、関部の位置と合致しており、把装具と考えられる。把縁の端から約 3.5cmより茎尻側には約 1.7cmにわたって布が付着する。布は４㎜ほどの間隔が生ずるようにずらしながら、茎尻から関部方向へと上重ねにして巻かれる。関側の布の範囲の外側にはわずかな段差があり、把縁が把間より太く作出され、把間に布が巻かれたことをうかがわせる。把装具は一木造りであり、把縁から約 4.8cmの位置の把間側面に幅３㎜ほどの溝（把間側面孔）をあける（図版 12 － 2）。把間の断面は倒卵形である。なお、鞘の木質端と把縁の木質端との間には３～４㎜ほどの隙間があり、鞘身とは別造りの鞘口装具の存在を想定できる。



第 21 図　短　　刀

短 刀 2　茎部の破片（3）。残存長 4.7cm、最大幅 1.2cm、茎部の断面形は腹側が薄い長方形である。全体に木質が付着し、切先側の端部から 1.3cmより茎尻側には布が付着する。切先側の布の範囲の外側にはわずかに段差があり、把縁が把間より太くつくりだされる。把間の布は幅５㎜ほどずらしながら茎尻側から関部側へと上重ねにして巻かれる。把間の断面形は倒卵形である。把間側面孔は確認できない。

４　農工具

農工具には、方形鍬鋤先、鉄鎌、鉄斧（有袋・短冊形）、鉄鉈、鉄鑿がある（第22～26図、図版８～11）。各種が揃っており、ある程度まとまった数量を副葬する点が特筆される。また、農工具には異なる器種の銹着したものが複数あり、副葬位置や副葬方法をうかがわせるものとして注目される。

（１）方形鍬鋤先（第22図、図版８）

折り返し部の数から、２点以上の存在を確認できる。柄の有機質を残す個体は確認できない。

方形鍬鋤先１　縦幅5.9cm、着柄部幅約3.5cmを残す（１）。着柄部から刃部へと幅を広げる形態をもつ。厚さ２～３㎜ほどの鉄板の両端全体を折り曲げ、内寸厚６～７㎜ほどの着柄部を形成する。刃部は中央付近を水平とし、屈曲して斜めに着柄部へと連続する丸みのない直線で構成される形状である。着柄部に木質の付着はみとめられない。

方形鍬鋤先２　縦幅7.3cm、着柄部幅10.0cmで、直線的な着柄部から刃部付近で幅を広げる形態をもつ（２）。厚さ３㎜ほどの鉄板の両端全体を折り曲げ、内寸厚７㎜ほどの着柄部を形成する。刃部は中央の幅５cmほどの範囲が水平となり、斜めに屈曲して直線的に着柄部へと連続する。丸みのない直線で構成される刃部形状である。着柄部に木質の付着はみとめられない。

（２）鉄　　鎌（第23図、図版８）

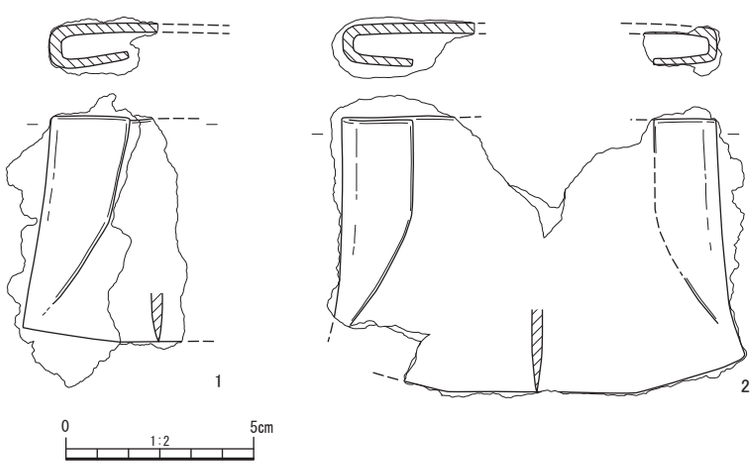
刃部先端と折り返し部の数、法量の異同から５点以上が副葬されたと判断しうる。いずれも直刃鎌である。着柄部に木質など有機質を残す例は確認できない。

鉄鎌１　残存長7.8cm、最大幅4.2cmの先端部側の破片で、折り返し部は遺存しない。厚さ３㎜弱で楔形の断面をなす。先端部が直線的で、刃部が一定の幅を保つ短冊形の形態をもつ。

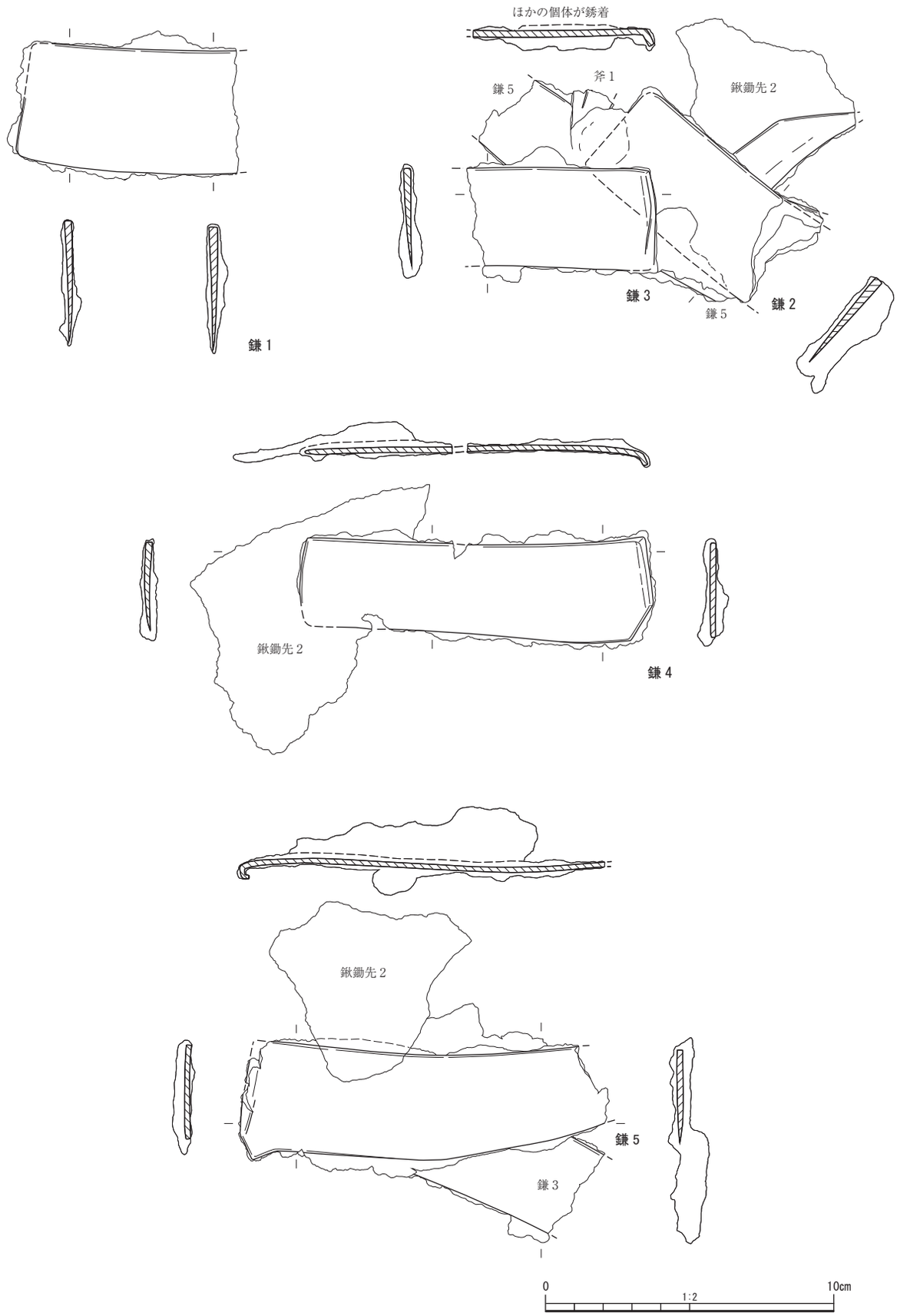
鉄鎌２　残存長7.9cm、最大幅3.7cmの先端部側の破片で、折り返し部は遺存しない。厚さ３㎜弱で楔形の断面をなす。先端部が直線的で、刃部が一定の幅を保つ短冊形を呈する。鎌３、鎌５、方形鍬鋤先２、有袋鉄斧１と銹着する。

鉄鎌３　残存長6.6cm、最大幅3.5cmの着柄部側の破片である。折り返し部は全体を立ち上げる程度に緩やかに曲げ、下半にあたる刃部側をさらに強く曲げる。刃部を手前、着柄部を右に置いた場合、折り返し部が上を向く甲技法〔都出1967：45〕である。厚さ３㎜弱で、刃部は楔形の断面をなす。刃部が一定の幅を保つ短冊形を呈する。着柄部に木質の付着はみとめられない。鎌２、鎌５、方形鍬鋤先２、有袋鉄斧１と銹着する。

鉄鎌４　長さ12.2cm、最大幅3.5cm、最小幅3.1cm、最大幅が着柄部付近にあり、先端部へとわずかに幅を狭めながらも短冊形を呈する個体である。背側全体に反りのある形状をもち、刃の研ぎ出し範



第22図　方形鍬鋤先



第23図　鉄　　鎌

囲がわずかに湾曲する。刃部を手前、着柄部を右に置いた場合、折り返し部が上を向く甲技法〔都出1967〕である。着柄部は上半を立ち上げる程度に緩やかに曲げ、下半は鉄板の角を斜めに切り落とす。厚さ２㎜弱で、刃部は楔形の断面をなす。着柄部に木質の付着はみとめられない。

鉄 鎌 5　残存長 12.7㎝、最大幅 4.0㎝、最小幅 2.9㎝、最大幅が着柄部付近にあり、刃部側は中ほどで幅を狭めて先端部へと至る。先端部は遺存しない。背側全体にやや強めの反りがある。刃部側の屈曲部は研ぎ出しがおこなわれる範囲と一致し、折り返し部付近の形状がいびつであることから、研ぎ出しによる変形が想定される。刃部を手前、着柄部を右に置いた場合、折り返し部が下を向く乙技法〔都出 1967〕である。着柄部は鉄板の端部２㎜ほどの範囲を直角に曲げ、さらに４㎜ほどの範囲を直角に曲げて形成される。研ぎ出しによる二次的な変形も想定されるが、折り返し部の下半は鉄板の角を斜めに切り落とす加工がなされたようである。厚さ２㎜弱で刃部は楔形の断面をなし、本来は一定の幅を保つ短冊形の形態であったと想定される。着柄部に木質の付着はみとめられない。

（３）鉄　　斧（第 24 図、図版９）

鉄斧は有袋鉄斧３点（１～３）と短冊形鉄斧１点（４・５）である。欠損が多く、いずれも遺存状態が悪い。また、着柄部に木質などの有機質が残存する例はみあたらない。

有袋鉄斧１　現存長 5.8㎝、刃部現存幅 2.5㎝で、基部は残存しない（１）。鉄板を折り曲げて形成した袋部がわずかに残る。袋部の鉄板の厚さと刃部最大厚は 5.5㎜、刃部横断面の中央付近がやや薄くなる形状をもつ。袋部と刃部の境界に屈曲があり、きわめて突出度の低い肩をもつ。

有袋鉄斧２　現存長 7.4㎝、刃部現存幅 4.3㎝で、基部は幅３㎝ほどに復元される（２）。鉄板を折り曲げて袋部を形成し、袋部の合わせ目は密着せず、開いた形態となる。袋部の鉄板の厚さは４㎜程度、と刃部最大厚は９㎜程度である。刃部横断面の中央付近がわずかに厚くなる。袋部と刃部の境界は不明瞭な無肩の鉄斧である。袋部に木質などの付着はみとめられない。

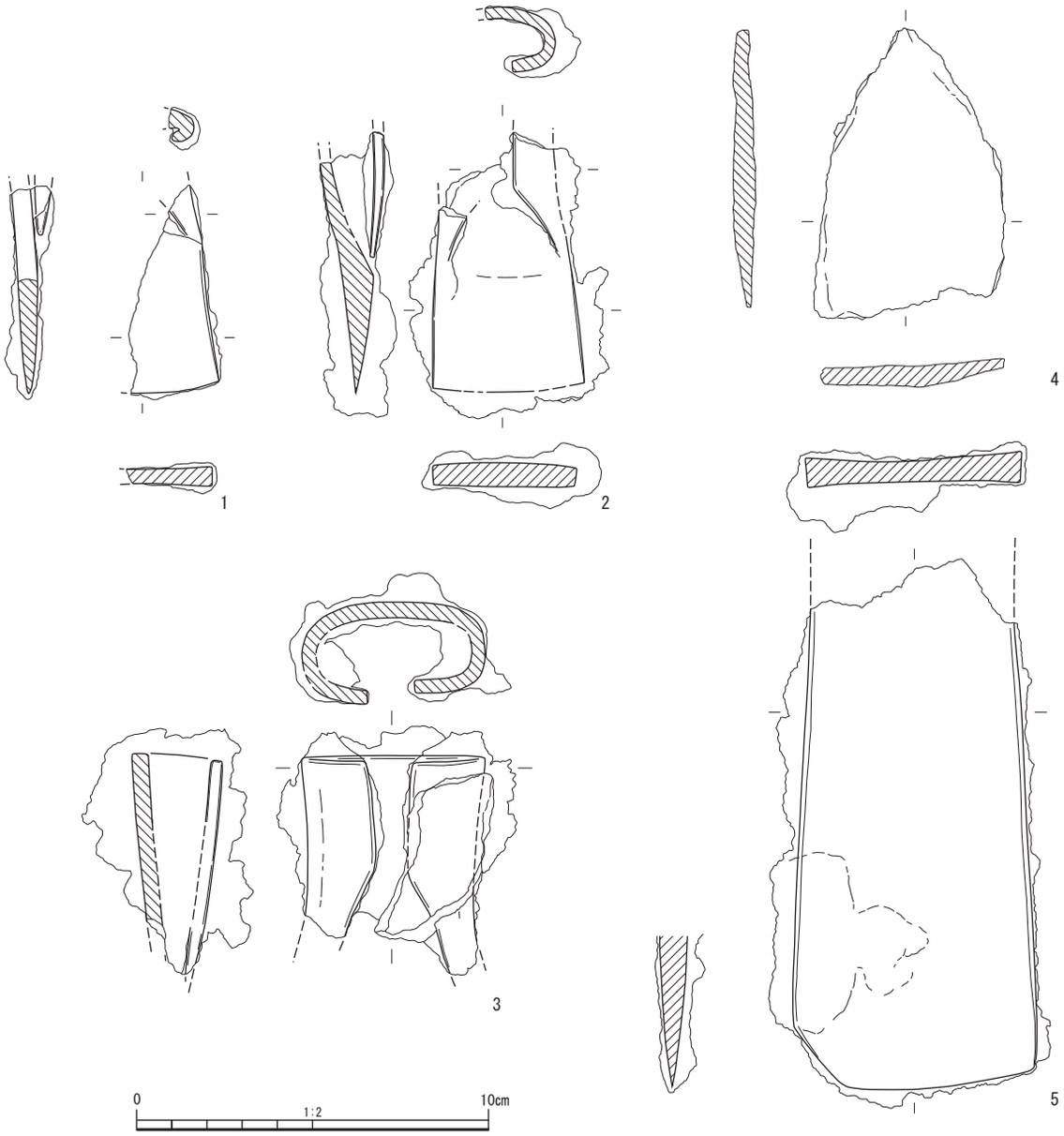
有袋鉄斧３　現存長 6.2㎝、基部現存幅 5.2㎝、基部厚 2.6 ～ 2.8㎝で、刃部を欠損する（３）。鉄板を折り曲げて、断面楕円形の袋部を形成する。袋部の合わせ目は密着せず、１㎝近く開いた形態となる。袋部の鉄板の厚さは３～４㎜程度である。袋部に木質などの付着はみとめられない。なお、図で右側の袋部外面には銹着したほかの鉄製品が剥離したとみられる痕跡がある。

短冊形鉄斧　梅原報告の写真では完存していた個体であるが（第 13 図－ 13）、現状は基部側を大きく欠損する（４・５）。本来は全長 22.7㎝程度であったが、現存長約 15.2㎝、最大幅 6.9㎝、最大厚９㎜を測る。身部の断面形態はおおむね長方形であり、中央付近がやや薄い。最大幅が刃部に限りなく近い身部にあり、図で左下の隅を浅く切り落としたような形態をもつ点が特徴である。

（４）鉄　　鉇（第 25・26 図、図版 10 ～ 11）

鉄鉇の総数は刃部の数が８点、茎尻の数が５点であり、少なくとも８点以上が副葬されたことを確実視できる。柄の有機質が良好に遺存する個体が多く、鉇柄の構造を検討するうえできわめて重要な資料群といえる[(1)]。

鉄 鉇 1　現存長 3.8㎝、刃部長 2.5㎝、刃部幅 1.1㎝、茎部幅８㎜、茎部厚３㎜の刃部を中心とした破片である。茎部にたいし、平面形がコテ状に広がる裏すきのある刃部をもつ。刃部の反りは２㎜程度と弱い。茎部は断面長方形である。刃部に限りなく近い位置に柄縁の木質がおよぶ。柄の木質は茎部をおさめる溝を浅く彫り込み、茎部が柄に深く落とし込まれない構造をもつ。また、平面形態では柄縁が柄間より幅広につくられた可能性が高いが、側面観では段差のない形態であったと考えられる。



第24図　鉄　　斧

なお、本資料は2014年に倉吉市内の個人旧蔵品が米子市文化財団埋蔵文化財調査室に寄贈されたものである〔小原2014〕。

鉄 鉇 2　現存長10.5cm、刃部から茎部上半にかけての破片である。刃部長2.8cm、刃部幅1.3cm、刃部付近の茎部幅9.5㎜、刃部付近の茎部厚３㎜と、茎部にたいしてコテ状に広がる裏すきのある刃部をもつ。刃部の反りは約５㎜とやや強い。茎尻側の幅は９㎜、厚さは３㎜である。茎部は断面長方形である。茎部には柄の木質と布が良好に遺存する。刃部には別個体のものとみられる柄の木質と布が、柄縁および布巻き上面にも別個体の木質が付着する。

茎部の上面は、別個体の木質が付着する以外、ほかに木質が付着しないことから、柄は茎部をおさめる溝を彫り込む構造とみられる。柄縁と柄間の境界は明瞭であり、全体に柄縁が柄間より一回り太くつくり出される（図版12－３･４）。柄縁は長さ1.1cm､幅２cm程度となる。柄は一木造りと判断され、柄縁が刃部に接する位置に装着される。

柄と茎部の固定は、折り重ねた布を細い帯状にして７㎜ほどずらしながら、一部を重ねて巻きつけることによっておこなう。布巻きは柄縁側から茎尻側へと進行する。布巻きの範囲は６㎝ほどが遺存する。茎部が柄縁付近では柄に完全におさまる構造である。

鉄 鉈 3　現存長 12.5㎝、刃部から茎部中ほどにかけての破片である。刃部長 2.7㎝、刃部幅 1.3㎝、刃部付近の茎部幅９㎜、刃部付近の茎部厚３㎜と、茎部にたいしコテ状に広がる裏すきのある刃部をもつ。刃部の反りは約４㎜とやや強い。茎尻側の幅は９㎜、厚さは３㎜である。茎部は断面長方形である。茎部には柄の木質と布が良好に遺存する。刃部には別個体とみられる柄の木質と布が付着する。

茎部の上面は、別個体の木質が付着する以外、ほかに木質が付着しないことから、柄は茎部をおさめる溝を彫り込む構造と考えられる。柄縁と柄間の境界は、側面観では段差がみられない（図版 12 －５）。柄縁は長さ 1.4㎝。柄は一木造りと判断され、柄縁が刃部に接する位置に装着される。

柄と茎部の固定は、折り重ねた布を細い帯状にして４～５㎜ほどずらしながら、一部を重ねて巻きつけておこなう。布巻きは柄縁側から茎尻側へと進行する。布巻きの範囲は８㎝ほどが遺存する。茎部が柄縁付近では柄よりごくわずかに浮いて露出するか、ほぼおさまる構造になると考える。

鉄 鉈 4　現存長 15.6㎝、刃部と茎尻付近を欠損する個体である。刃部現存長 1.9㎝、刃部幅 1.1㎝、刃部付近の茎部幅７㎜、刃部付近の茎部厚３㎜と、茎部にたいして緩やかにコテ状に広がる裏すきのある刃部をもつ。刃部の反りは約２㎜とやや弱い。茎尻側の幅は７㎜、厚さは２㎜である。茎部は断面長方形である。茎部には柄の木質と布が良好に遺存する。刃部上面には布が付着し、製品が布に巻かれて副葬された可能性を示唆する。

茎部の上面には木質が付着しないことから、柄は茎部をおさめる溝を彫り込む構造とみられる。柄縁と柄間の境界は、側面観に段差があることから、柄縁が柄間より一回り太く作出されるものであった可能性が高い。布が巻かれない範囲から、柄縁は長さ 1.2㎝となる。柄は一木造りと判断され、柄縁が刃部よりやや離れた位置に装着される。

柄と茎部の固定は、折り重ねた布を細い帯状にして６～ 10㎜ほどずらしながら、一部を重ねて巻きつけることによっておこなう。布巻きの間隔は、柄縁に近いところは広く、離れた場所は密になる。布巻きは柄縁側から茎尻側へと進行する。布巻きの範囲は 10.5㎝ほどにおよび、それより茎尻側にはほどこされない。茎部は柄縁付近では柄に深くおさまる。

鉄 鉈 5　現存長 16.0㎝、茎尻付近を欠損する個体である。刃部現存長 1.9㎝、刃部幅１㎝、刃部付近の茎部幅７㎜、刃部付近の茎部厚３㎜と、茎部にたいして緩やかにコテ状に広がる裏すきのある刃部をもつ。刃部の反りは約４㎜とやや強い。茎尻側の幅は 6.5㎜、厚さは３㎜である。茎部は断面長方形である。茎部には柄の木質と布が遺存する。刃部上面には布が付着する。

茎部の上面には木質が付着しないことから、柄は茎部をおさめる溝を彫り込む構造とみられる。柄縁と柄間の境界は明瞭でなく、側面観では柄縁が柄間と段差なく連続する形状のものであった可能性が高い。布が巻かれない範囲から、柄縁は長さ 1.3㎝となる。柄は一木造りと判断され、柄縁が刃部に接した位置に装着される。

柄と茎部の固定は、折り重ねた布を細い帯状にしてずらしながら、一部を重ねて巻きつけることによっておこなう。布巻きの間隔は、明らかなところで８㎜程度である。布巻きは柄縁側から茎尻側へと進行する。布巻きの範囲は 11.5㎝ほどにおよぶ。茎部は柄にほぼおさまる構造になると考えられる。

鉄 鉈 6　現存長 13.1㎝、刃部と茎尻付近を欠損する個体である。刃部付近の茎部幅９㎜、刃部付近の茎部厚３㎜、茎尻側の幅は１㎝、厚さは３㎜である。茎部は断面長方形である。茎部には柄の木質と布が良好に遺存する。ただし、別個体のものとみられる柄の布が柄縁付近に付着する。

茎部の上面には木質が付着しないことから、柄は茎部をおさめる溝を彫り込む構造とみられる。柄縁と柄間の境界は明瞭であり、全体に柄縁が柄間より一回り太くつくり出される。柄縁は長さ１㎝。柄は一木造りと判断される。

柄と茎部の固定は、折り重ねた布を細い帯状にして４～５㎜ほどずらしながら、一部を重ねて巻きつけることによっておこなう。布巻きは柄縁側から茎尻側へと進行する。布巻きの範囲は12㎝ほどが遺存する。茎部が柄縁付近では柄に深くおさまる構造である。

鉄 鉇 7　現存長11.2㎝の茎尻を含む茎部下半の破片である。2006年の資料報告では鉄鑿としたが〔岩本2006〕、柄の構造から鉄鉇であると認識をあらためる。刃部側の幅は8.5㎜、茎尻付近の幅は８㎜、厚さは３㎜である。茎部は断面長方形である。茎部の刃部側には柄の木質が遺存する。茎部の上面に木質が付着しないことから、柄は茎部をおさめる溝を彫り込む構造とみられる。茎尻付近位は木質と布が断片的に付着しており、別個体の柄に由来するものと考えられる。

鉄 鉇 8　現存長7.4㎝の茎部下半の破片である。茎尻は遺存しない。幅８㎜、厚さ３㎜の断面長方形の茎部である。目の細かな布が巻きつくように付着する。

鉄 鉇 9　現存長4.5㎝の茎尻を含む破片である。幅８㎜、厚さ2.5㎜、断面長方形の茎部である。鉇の柄に由来する布とは異なる目の細かな布が付着する。

鉄 鉇 10　現存長5.7㎝の茎尻を含む破片である。幅5.5㎜、厚さ２㎜、断面長方形の茎部である。茎部の片面には広範囲に布が付着する。

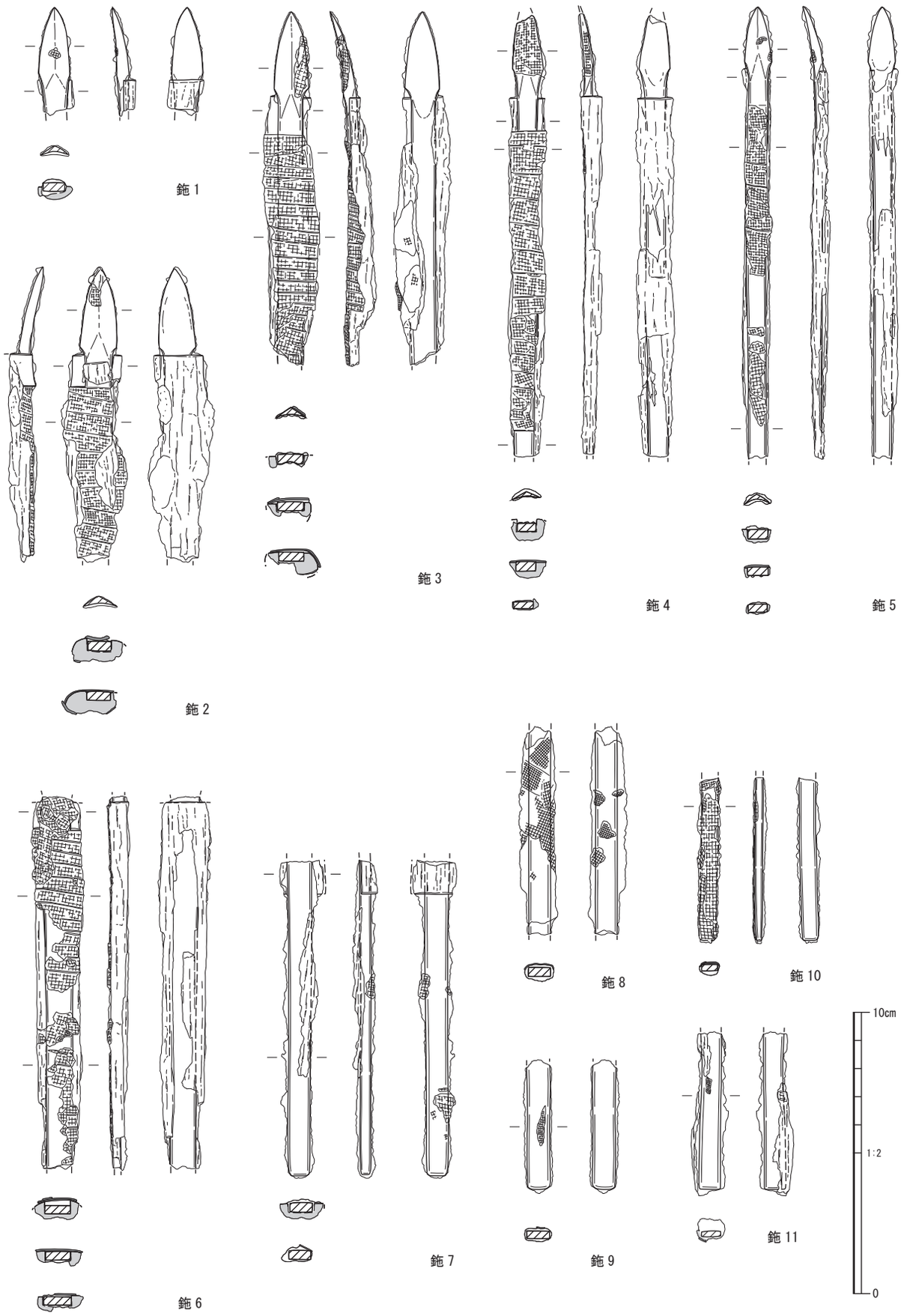
鉄 鉇 11　現存長5.6㎝の茎尻を含む破片である。幅７～８㎜、厚さ２㎜、断面長方形の茎部である。布と木質の付着が上面と下面にみとめられる。

鉄 鉇 12　現存長25.8㎝、茎部を欠損するが良好に遺存する個体である。刃部長2.2㎝、刃部幅1.1㎝、刃部付近の茎部幅8.5㎜、刃部付近の茎部厚３㎜と、茎部にたいしてややコテ状に広がる裏すきのある刃部をもつ。刃部の反りは約５㎜とやや強い。茎尻側の茎部幅は８㎜、茎部厚は３㎜であり、茎部はほぼ一定の幅と厚さを保つ。茎部は断面長方形である。刃部は裏面に布が付着し、茎部には柄の有機質が良好に遺存する。刃部裏面の布は、副葬時に製品を包んだ布の可能性が考えられる。

茎部の上面には木質が付着しない点から、柄は茎部をおさめる溝を彫り込む構造と判断される。柄の刃部側の端から長さ８㎜ほどは茎尻側より一回り太くつくり出され、柄縁が柄間より強調された形態となる。良好に遺存する部分から、柄間の幅は２㎝近くになると想定される。さらに、図で柄縁の右側の部分と茎部との関係は、茎部の上部に柄縁の木質が回り込んで被さる状況にあることを観察できる（図版12－６・７）。2006年の資料紹介ではこれを柄縁の上部に別材を接合したものとしたが〔岩本2006〕、柄縁の木質に加工された表面が遺存していること、柄縁側面に部材の接合痕跡はみられず、木質も連続することから、柄は一木造りであると認識をあらためる。すなわち、柄縁の右側を茎部に回り込むような構造は、一木からつくり出されたものであり、茎部と柄の固定をより強固にするための造作と理解しておきたい。柄は柄縁が刃部よりやや離れた位置に装着される。

柄と茎部の固定は、折り重ねた布を細い帯状にして５～７㎜ほどずらしながら、一部を重ねて巻きつけておこなう。布巻きは柄縁側から茎尻側へと進行する。布巻きの末端は最後の２巻きほどをいったん緩く巻きつけ、その内側をくぐらせて茎尻側から柄縁側へと通したのち、強く締めて固定する（図版12－８）。布巻きの範囲は10.7㎝におよび、それより茎尻側にはほどこされない。茎部は柄縁付近では柄に完全におさまるが、茎尻側では厚みの半分近くが柄の上面より浮いて露出する。

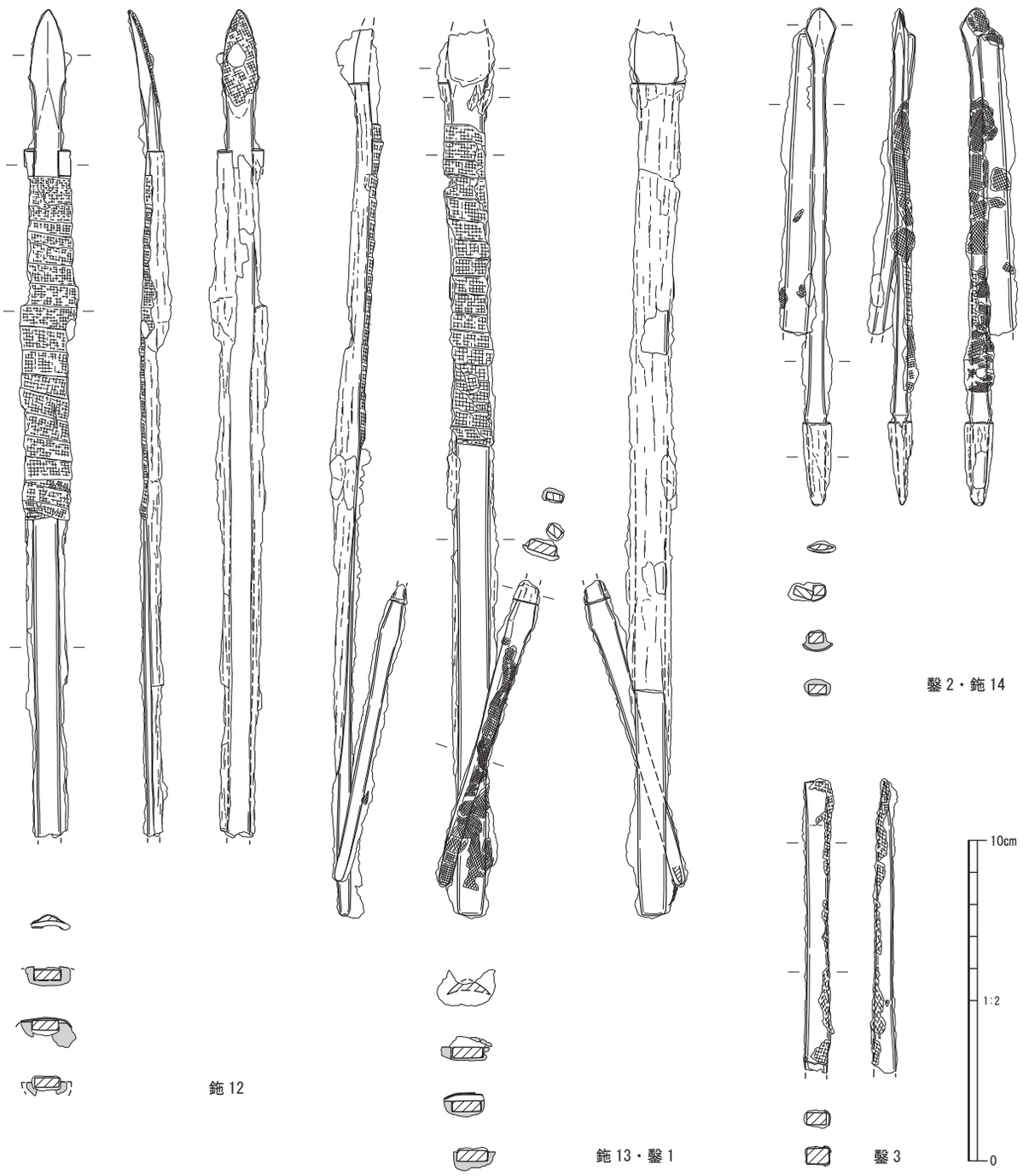
鉄 鉇 13　現存長27.6㎝、刃部を欠損するが良好に遺存する。全長は29㎝程度に復元される。刃部現存長1.5㎝、刃部幅1.4㎝、刃部付近の茎部幅9.5㎜、刃部付近の茎部厚３㎜と、茎部にたいしてコ



第25図　鉄　　鉈

テ状に広がる裏すきのある刃部をもつ。茎尻付近の幅は８㎜、厚さは3.5㎜であり、茎部はほぼ一定の幅と厚さを保つ。茎部は断面長方形である。茎部には柄の木質と布が良好に遺存する。また茎尻付近には、銹着した鉄鑿１とともに、柄に由来する布とは異なる目の細かな布が巻かれる。

茎部の上面には、柄縁付近に別個体の木質が付着する以外、ほかに木質が付着しないことから、柄は茎部をおさめる溝を彫り込む構造とみられる。柄縁と柄間の境界は、側面観では段差がみられず、平面観は遺存状態が悪くはっきりしないが柄縁が柄間より幅広に作出される可能性もある。布が巻かれない範囲から、柄縁は長さ1.3cmとなる。柄は一木造りと判断され、その全長は21.5cmである。柄



第26図　鉄鉇・鉄鑿

縁が刃部に接する位置に装着され、茎部の茎尻側の約４㎝程度が柄から露出する構造となる。

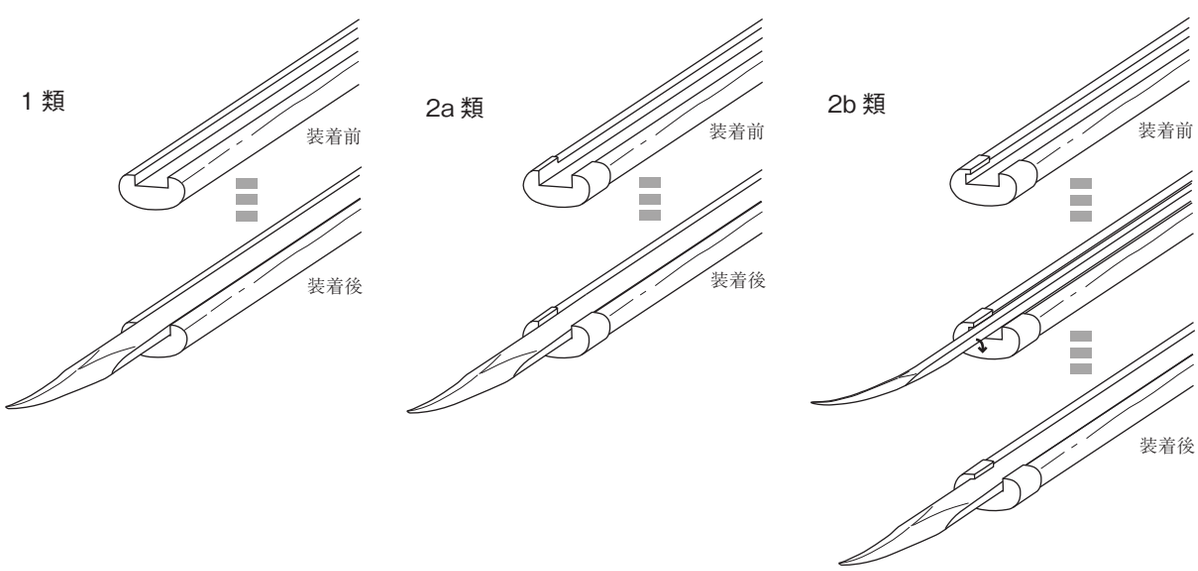
柄と茎部の固定は、折り重ねた布を細い帯状にして５～６㎜ほどずらしながら、一部を重ねて巻きつけることによっておこなう。布巻きは柄縁側から茎尻側へと進行する。布巻きの範囲は10.0㎝におよび、それより茎尻側にはほどこされない。茎部は柄縁付近では柄に完全におさまるが、茎尻側では厚みの大部分が柄の上面より浮いて露出する。

鉄 鉈 14　現存長9.4㎝の茎尻を含む破片。茎尻付近の幅は６㎜、刃部側は７㎜、厚さは３㎜である。茎部は断面長方形。鉄鑿２と銹着し、鉈の柄に由来する布とは異なる目の細かな布が巻かれる。

鉄鉈の構造　上述した各個体についての観察所見をふまえて、伯耆国分寺古墳から出土した鉄鉈の構造的特徴について整理する（第27図、第２表）。

柄の構造は、いずれも一木造りの材に溝を彫り込み、溝に茎部を嵌め込むように装着したものと考えられる。ただし、柄縁の形態や茎部をおさめる溝の深さには、個体ごとの差がみとめられる。とくに柄縁は、柄間と側面間では段差なく作出されるもの（１類）と、柄間よりも一回り太く作出されるもの（２類）の大別二者が存在する。さらに、柄縁を柄間より太くつくる２類は、柄縁部分の溝を全体的に茎部とほぼ同じ幅にするもの（2a 類）と、柄縁部分の溝上部の片側のみを茎部よりわずかに狭くするもの（2b 類）に細分できる。2b 類の場合、柄縁の形態から柄に彫り込んだ溝に茎部を落とし込んで装着することはできない。また、柄の小口から茎部を挿入する方法も、柄が長いことから想定しにくく、小口から挿入する必要のない柄の構造である１類や 2a 類との装着方法との異同をふまえると妥当なものとは考えにくい。柄の溝の片側上部のみが茎部に被さるような造りとなっている点を考慮すれば、柄の長軸を縦にとった場合に柄の溝にたいして茎部を横からスライドして嵌め込むように装着した可能性が高い。柄と茎部とに隙間が生じないような造りが指向されたことが、2b 類の構造が創出された背景として想定されよう。

なお、柄と茎部との固定は、すべて折り重ねた細帯状の布を用い、柄縁側から柄尻へと上重ねに巻くことによっておこなう。布巻きは柄の全長にたいして半分ほどの範囲におこなわれる。柄は柄縁が刃部に接する位置に装着される例が多く、刃部から離れた位置に装着される例は少ない。刃部に接して装着される例が多いのは、それを実現可能とするコテ状の刃部形態の例で占められることと関連す



第 27 図　鉄鉈の柄縁付近にみる構造の違い

第２表　鉄鉇一覧表

番号	全長(cm)	部位	柄					刃部			茎尻
			構造	類型	柄縁／柄間	柄尻	装着位置	柄巻	平面形態	反り	—
鉄鉇 1	3.8	刃部片	一木造	1 類	段差なし	—	接	—	コテ弱	やや弱（2㎜）	—
鉄鉇 2	10.5	刃部～茎部上	一木造	2a 類	段差あり	—	接	布	コテ	やや強（5㎜）	—
鉄鉇 3	12.5	刃部～茎部中	一木造	1 類	段差なし	—	接	布	コテ	やや強（4㎜）	—
鉄鉇 4	15.6	刃部～茎部下	一木造	2a 類	段差あり	—	離	布	コテ弱	やや弱（2㎜）	—
鉄鉇 5	16.0	刃部～茎部下	一木造	1 類	段差なし	—	接	布	コテ弱	やや強（4㎜）	—
鉄鉇 6	13.1	茎部上～茎部中	一木造	2a 類	段差あり	—	—	布	—	—	—
鉄鉇 7	11.2	茎部下～茎尻	一木造	—	—	茎途中	—	—	—	—	一文字
鉄鉇 8	7.4	茎部下	—	—	—	茎途中	—	—	—	—	—
鉄鉇 9	4.5	茎尻	—	—	—	茎途中	—	—	—	—	一文字
鉄鉇 10	5.7	茎尻	—	—	—	茎途中	—	—	—	—	一文字
鉄鉇 11	5.6	茎尻	—	—	—	茎途中	—	—	—	—	一文字
鉄鉇 12	25.8	刃部～茎部下	一木造	2b 類	段差あり	—	離	布	コテ弱	やや強（5㎜）	—
鉄鉇 13	27.6	刃部～茎尻	一木造	1 類？	段差なし	茎途中	接	布	コテ	やや強？	一文字
鉄鉇 14	9.4	茎部下～茎尻	—	—	—	茎途中	—	—			一文字

〔凡例〕 柄の「類型」区分は、第 27 図参照。「柄縁／柄間」の段差は、側面観にもとづく。柄の「装着位置」は、刃部との位置関係を表記。
刃部の「反り」は、側面観における刃部先端と茎部上面との比高値による。各項目の「—」は、欠損のため判断できないことを示す。

るのであろう。なお、柄尻の位置は茎部の下半に達するが、茎尻は柄がなく露出した状態となるのが基本的なあり方であったとみられる。茎尻まで柄におさまる構造となる個体は確認できない。

以上のように、伯耆国分寺古墳の鉄鉇は細部形態には個体によって違いがみとめられるが、柄の基本的な構造や柄巻きについては全体として共通性の高いものといえる。特定の工房などで一括して生産された可能性の高い個体からなる製品群と評価できよう。

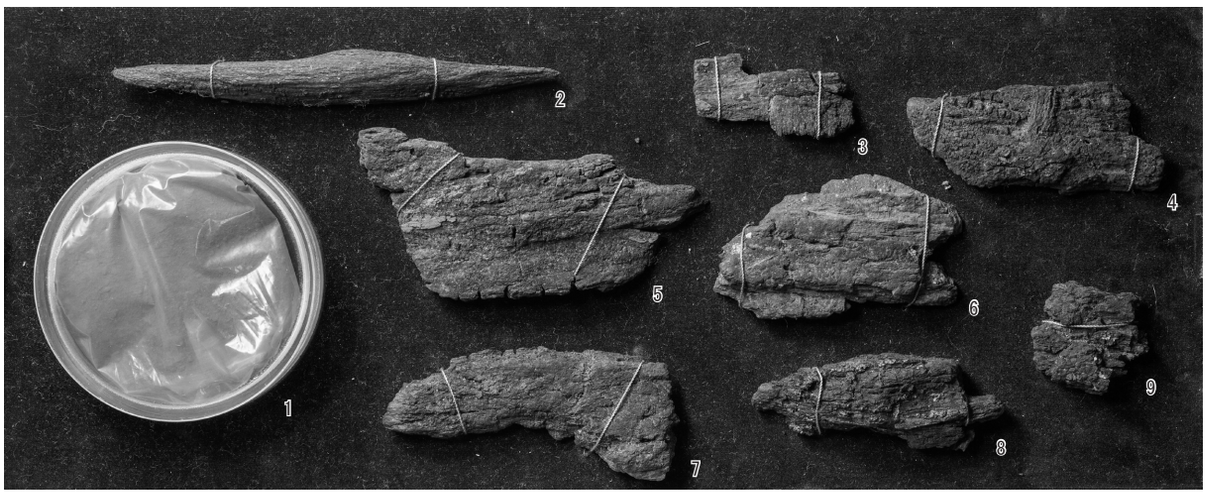
（５）鉄　　鑿（第 26 図、図版 10・11）

鉄鑿は３点を確認できる。梅原報告では鉄鏃として報告された２点がこれに該当する〔梅原 1924〕。ここではその形態的特徴と柄の構造から、これらを鉄鑿としてとりあつかう。鉄鑿は細部の形状の異なる３点が存在し、うち２点は鉄鉇と銹着した状態をとどめる。副葬時に鉄鑿と鉄鉇が一括してとりあつかわれたことがわかる。これらは柄の有機質が遺存する点でも共通点がある。

鉄 鑿 1　現存長 9.8㎝。長い頸部の先端に丸い刃部がみとめられる。頸部長は 8.5㎝、刃部付近の幅４㎜弱、頸部中ほどの幅５㎜、厚さ 2.5㎜である。関は山形に突出させ、幅は８㎜ほどとなる。茎部には柄の木質が付着する。木質は茎部の周囲に付着しており、一木の小口を穿孔した柄に茎部を挿入したものである。鉄鉇 13 と銹着する。

鉄 鑿 2　全長 15.4㎝。圭頭状の山形を呈する刃部に長い頸部が付属する。刃部長７㎜、刃部幅９㎜、頸部長 12㎝、頸部最小幅３㎜、刃部と頸部の境界はナデ関である。刃部は厚さ２㎜の両鎬であり、頸部は厚さ３㎜の断面方形を呈する。関は山形に突出させ、幅は約 6.5㎜、厚さ約５㎜である。茎部は長さ 3.6㎝、幅５㎜程度、厚さ約３㎜の断面長方形を呈し、柄の木質が付着する。木質は茎部の周囲に付着しており、一木の小口を穿孔した柄に茎部を挿入したものである。鉄鉇 14 と銹着し、ともに目の細かな布で巻かれている。

鉄 鑿 3　現存長 9.1㎝。横一文字の直線的な刃部に頸部が付属する。頸部から屈曲して厚みを減じる部分を刃部とすると、長さは 1.5㎝、幅９㎜、最大厚４㎜となる。頸部は残存長 7.6㎝、頸部最小幅７㎜、最大厚７㎜で、断面長方形を呈する。茎部側へと頸部は幅を広げ、厚みを増す。茎部は欠損して遺存しない。巻かれるように刃部から頸部の広範囲に布が付着する。



第 28 図　赤色顔料・棺材

（６）副葬状態の復元

伯耆国分寺古墳から出土した農工具には、異なる器種が銹着した状態をとどめるものがあり、本来の副葬状態を復元する手がかりとしうる。すなわち、方形鍬鋤先・鉄鎌・鉄斧が銹着する状況と、鉄鉇・鉄鑿が銹着する状況がわかれた状態で確認される。方形鍬鋤先・鉄鎌・鉄斧と鉄鉇・鉄鑿とでは、副葬位置が異なっていたとする梅原報告の記述〔梅原 1924：56-57〕とも整合的であるといえよう。

さらに、こうした副葬位置の異同と対応して、器種ごとのとりあつかいにも違いがみられる。銹着した方形鍬鋤先・鉄鎌・鉄斧には柄に由来する木質などの有機質の付着がまったくみとめられないのにたいし、鉄鉇と鉄鑿には柄の木質がともなうのである。この点を積極的に評価すれば、方形鍬鋤先・鉄鎌・鉄斧については、副葬時に柄をとりはずしたか、もともと柄がとりつけられていないものをまとめて東小口付近に副葬したと考えることができる。

５　赤色顔料

赤色顔料は約 190 ｇが現存する（第 28 図－１）。このほか、2014 年に米子市文化財団埋蔵文化財調査室へ寄贈された倉吉市内の個人旧蔵品に赤色顔料がわずかに存在する〔小原 2014〕。後者については、本書第４章で理化学的な分析結果を報告している〔第４章上山論考・南論考〕。

６　棺　　材

棺材と想定される木質片８点の存在が確認される（第 28 図－２～９）。広範囲に赤色顔料が付着し、大きさと形状から棺材の一部が残存したものと考えられる。

２は長さ約 16.3㎝、幅約 2.0㎝、厚さ約 1.7㎝。３は長さ約 5.8㎝、約幅 2.5㎝、厚さ約 8.0㎜。部分的に赤色顔料が付着する。４は長さ約 8.5㎝、幅約 4.0㎝、厚さ約 1.1㎝。わずかに赤色顔料の付着がある。５は長さ約 12.0㎝、幅約 6.0㎝、厚さ約 2.0㎝。部分的ながら広範囲に赤色顔料が付着する。６は長さ約 9.0㎝、幅約 5.0㎝、厚さ約 1.1㎝。赤色顔料が広範囲に付着する。７は長さ約 4.5㎝、幅約 3.6㎝。８は長さ約 11.7㎝、幅約 4.5㎝、厚さ約 1.5㎝。部分的に赤色顔料が付着する。９は長さ約 9.0㎝、幅約 3.2㎝、厚さ約 2.0㎝。

註

（1）鉄鉇の報告は、岩本が作成した草稿に磯貝が加除筆をおこなったものである。第27図は磯貝が作成した。

引用文献

秋山進午　1998「夔鳳鏡について」『考古学雑誌』第84巻第1号　日本考古学会　pp.1-26
岩本　崇　2008「三角縁神獣鏡の生産とその展開」『考古学雑誌』第92巻第3号　日本考古学会　pp.1-50
梅原末治　1924「因伯二國における古墳の調査」『鳥取縣史蹟勝地調査報告』第2冊　鳥取縣
岸本直文　1989「三角縁神獣鏡製作の工人群」『史林』第72巻第5号　史学研究会　pp.1-43
京都大学考古学研究室　2000「三角縁神獣鏡目録」『大古墳展―ヤマト王権と古墳の鏡―』東京新聞社　pp.248-254
小林行雄　1971「三角縁神獣鏡の研究―型式分類編―」『京都大学文学部研究紀要』第13　京都大学文学部　pp.96-170（1976『古墳文化論考』平凡社　pp.303-377　に加筆のうえ再録）
小原貴樹　2014「倉吉国分寺古墳出土の鉄鉇について」『しか』67部内連絡紙　山陰考古学研究所　pp.1-5
田中新史　1991「神門三・四・五号墳と古墳の出現」『邪馬台国時代の東日本』国立歴史民俗博物館　pp.130-136
都出比呂志　1967「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』第13巻第3号　考古学研究会　pp.36-51
豊島直博　2004「弥生時代における鉄剣の流通と把の地域性」『考古学雑誌』第88巻第2号　日本考古学会　pp.1-37
樋口隆康　1979『古鏡』新潮社
福永伸哉　1991「三角縁神獣鏡の系譜と性格」『考古学研究』第38巻第1号　考古学研究会　pp.35-58
松木武彦　1991「前期古墳副葬鏃の成立と展開」『考古学研究』第37巻第4号　考古学研究会　pp.29-58
脇坂光彦　1979「広島県芦品郡潮崎山古墳について」『古代学研究』第90号　古代学研究会　pp.27-30